
アンリ・マティス「交響乐的室内画」再考

アンリ・マティスが一九一一年に手がけた四枚の大室内画を考察の対象とする。これらは制作順に《桃色のアトリエ》（以下、《桃色》）、《画家の家族》、《茄子のある室内》、《赤いアトリエ》（以下、《赤》）から構成され、やや俯瞰気味の視点のもと、壁を正面に据えて室内を捉える構図で共通している。この造形的特質と、室内画を複数枚、短期集中的に制作したという成立事情から、アルフレッド・バー・Jr. は、マティスについての初の本格的モノグラフ『マティス ―その芸術と大衆』（一九五一年）において一章構成のもと、これら四作品を一つのシリーズとして紹介した。バーの著作はマティス研究の基礎を築いたもので、「四作品―シリーズ」と見なす傾向は今日まで有効な定説となっている。

だが、制作背景をめぐる近年の研究を踏まえれば、この四作品はシリーズとして制作されていなかった事実が明らかになる。そもそも《茄子のある室内》を除く三作品は、マティスの重要なコレクターであるシチューキンの依頼によるものであるが、《画家の家族》については《桃色》と《赤》とは別の依頼によって制作された。また《茄子のある室内》は、上記の依頼とは別に、完全に独立して制作されており、こうした状況から「四作品―シリーズ」と見なす定説は、今一度見直されるべき段階に来ていることが明白である。

そこで本発表では、《桃色》と《赤》を「同一テーマのヴァリエーション」の一つのペアとして捉え、《画家の家族》と《茄子のある室内》と切り離すべきだという説を提案したい。マティスのヴァリエーションとは、画業初期から断続的に取り組まれた、全く同じモチーフを異なる表現様式で描くという制作姿勢である。その多くは具象性と抽象性という、相対する特質をペア作品において描き分けることで達成される。この条件を厳密に考慮に入れると、同じアトリエの様子を描いた《桃色》と《赤》以外は描かれた場所が異なり、この点において《画家の家族》と《茄子のある室内》は同一テーマのヴァリエーションから外されねばならない。

この新解釈の論拠として、《桃色》と《赤》が、アトリエの一角を一続きに見渡すように描かれている点、そしてこの二作品においてのみ、画中画のいくつかの作例が、ペア作品の対応関係に基づきながら登場している点を指摘する。加えて、《赤》の赤外線写真を観察すると、完成作では赤一色に塗り込められた壁と床が明確に描き分けられていたことが認められ、当初画家は《桃色》の構図を踏襲して《赤》の制作を進めていたことが明らかとなる。これを踏まえると、二作品はシチューキン邸の壁に掛けられた際に、観者にヴァリエーション作品を回顧展のように追体験させるという構想をしていたと推測される。以上の指摘から、これまで一つのシリーズとしてしか顧みられなかった「交響乐的室内画」を新たな視点のもとに解釈しうる可能性を提示する。